

審査の結果の要旨

氏名 趙思嘉

近年、多くの分野で協力の起源と進化に関する研究が活発に行われている。既往研究においては外生的に与えられた制度（ルール、慣行等）と環境の下で、協力的行動が進化的に安定な戦略となる諸条件が明らかになっている。一方、社会的意思決定論の観点に立てば、集団全体を利する協力を個人に誘因付ける制度が、いかにして集団の成員自身によって選択されるのか、そもそもなぜ現在の協力を促す慣行やルールが生まれ、定着したのか、という問いに答える内生的制度選択論が必要となる。

本論文は、互助的な金融制度の原型として世界中で広く観察される「回転型貯蓄信用講（ROSCA）」を対象として、そのルール選択のメカニズムを理論、実証の両面から明らかにしようと試みた研究である。ROSCA の態様や運用ルールは地理的、歴史的要因によって様々に異なるが、本論文では現存する ROSCA の内、少なくとも過去数百年にわたる実施履歴があり、かつ地域内におけるルールの多様性が存在している中国貴州省の ROSCA を対象とした。

本論文の冒頭部分（第2章）では、人間社会における協力の起源・進化とルール選択に関する文献調査を行った。ROSCA という社会慣行が、直接互惠性または間接互惠性を伴った協力の進化の一例であることを論じ、その性質について詳細な検討を行った。その結果、フリーライダーに対する処罰、ROSCA 継続による信用の獲得、経済的安全網の供給を通じた集団淘汰をはじめとする、向社会行動の生成・進化過程に顕著な特徴が数多く観察されていることを示した。これらの結果は主として文化人類学・経済史等の分野で行われてきた ROSCA に関する既往研究の知見を、「協力の進化」という分析視角によって再整理した成果であると言える。

研究手法については第3章で詳述されている。本論文はゲーム論的モデルによって ROSCA の定式化を可能にした。個人が各 ROSCA に参加することによって得られる利得の比較較量によって、個人がどのルールの ROSCA に参加するかをシミュレーションによって分析した。これにより、個人・集団の属性や環境条件によって、結果としてどのような ROSCA のルールが支配的になるのかを明らかにした。次に、研究の後半では中国貴州省において現地調査を行い、実際に採用されている ROSCA のルールとその規定要因について質的分析ならびに実証分析を行った。

本研究の主な結果は以下のように要約できる。はじめに、シミュレーション分析の結果に依れば、支配的に選択される ROSCA ルールは、集団成員の互惠性および時間選好の分布に大きく規定される。一方、シミュレーションの各試行において観察されたルール選択の均衡は、各個人の期待利得の計算から得られる各 ROSCA ルールの選択割合とは必ずしも一致しない。これは、ROSCA の成立自体が個人的選択ではなく集合的選択であることから説明できる。シミュレーション結果において生じた非線形性や社会粘性は、現実の ROSCA ルールの選択行動においても観察される現象であり、ROSCA ルールの進化と分布を理解する上で多くの示唆を与

えるものである。

また、中国貴州省で実施した事例研究の結果からは、対象地域における慣習、価値規範等の文化的要因と ROSCA との関係が明らかになった。さらに、ROSCA ルールの選択に関するこれまでの歴史を調査することによって、モデル分析から予想されるフリーライダーの増加やそれに伴う ROSCA の破綻、さらに罰則強化を含むルール改定等の現象が実際に生じていることが確認された。特に本研究では村落住民の時間選好と、特定の ROSCA ルール（支払いにおける利子の有無）採用との関係を明らかにした。実証分析の結果、計測された住民の時間選好と、上記ルールの採用との間に有意な相関が得られた。後者は ROSCA 研究において新規性のある結果であると認められる。

総じて本研究は ROSCA を金融分野における相互扶助制度の一原型と捉えることによって、ROSCA 研究および社会的意思決定論に新たな知見を与えている。審査委員会においては、本研究が多様な ROSCA の一部のみを対象としていること、経時的な観測が行われておらず進化論的な考察が十分にされていないこと、事例・実証分析で扱った現象がシミュレーションで示唆された事象と厳密に一致していないこと、等が研究の限界として挙げられた。これらの問題が存在するとしても、尚、本研究の貢献は博士論文として必要な水準を満たしていると審査委員会において認められた。

なお本論文の一部は、堀田昌英教授との共同研究として発表されているが、論文提出者が主体となって分析および検証を行ったもので、論文提出者の寄与が十分であると判断する。

よって本論文は博士（国際協力学）の学位請求論文として合格と認められる。

以上 1990 字